

名山に名花あり

腰にガチャをぶら下げて、夜の上野のプラットホームを肩で風切って歩いていた頃は、花なんて目に入ってこなかった。マブタに浮かぶのは一ノ倉沢滝沢リッジであり、雨飾山フトンビシ岩峰群であった。ガチャとはハンマー、カラビナ、ハーケンのことであり、最近では死語に近いが登山用語として正しくは三ツ道具と呼ぶ。

若い頃目に入らなかった花が最近よく見えるようになった。年齢を重ねるっていいことだなとしみじみ思う。「山の遠足」をスタートさせて間もない頃は、「先生、この花の名前教えて下さい」と問われても、「あー」とか「うー」とかしか答えられなかった。しばらくするとずうずうしくなって、「ミヤマシラネソウ」と答えて涼しい顔をしていた。

高校時代に山登りを始めて知っていた花といえば、ミズバショウとニッコウキスゲくらいであった。大学に入った昭和38年、ぼくは本格的に登山の修行をすべく昭和山岳会に入会した。夏山合宿は扇沢から針ノ木峠を越え、平で黒部湖を渡り、五色ヶ原に登り返して立山、剣へと縦走するというものだった。当時体重は38kg、背負う荷物は30kg、扇沢から歩き始めて5分でバテて共同装備を取り上げられた。くやしい。ベソかきながら歩く。

3日目、五色ヶ原にさしかかる。何ひとつ思い出せないが、すばらしいお花畑であったはずだ。ぼくの後ろを歩く同期の仲間が、「岩崎、きれいだぞ、あれはなに、これはなに」と話しかけてくれるのだが、バテバテのぼくには、その声までが苦しさを増大させる要因となる。「すみません、声に気を取られると足が出なくなるので、声をかけないで下さい」とお願いする始末。花の名を覚えられようがない。

そんなボクが最初に覚えたホンマモンの高山植物の名前はハクサンフウロである。五色ヶ原の翌年、夏山合宿は南アルプス赤石岳・聖岳集中登山ということになって、ぼくは赤石沢北沢のパーティーに組み込まれた。沢の中で二晩、着の身着のまま眠れぬ夜を過ごし、3日目、ようやく北沢源頭を横切る登山道に抜け出た。足下に可愛らしいピンク色の花が咲いている。同期の古田忠さん（この年の12月30日、荒川岳前岳南面の雪崩で他界）が、「岩崎、これ知ってるか、ハクサンフウロっていうんだ」フラフラの頭にもハクサンフウロはしっかり刻み込まれた。

ウルップソウ、キヌガサソウ、シラネアオイ、コマクサ、エンレイソウ、サンカヨウ、ニリンソウ、ヒトリシズカ、イワカガミ、イワウチワ、ショウジョウバカマ、キクザキイチケ、いまではずい分多くの山の花の名を挙げられる。そうか、山の百名花なんて挙げてみたら面白いなと思いついた。皆さんにもご協力頂いて、あんな花、こんな花を紹介していったら……。そんな話が積もり積もって「遠足倶楽部の花の百名山」がまとめられたら楽しいな。